
神の世界

jnao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の世界

【Nコード】

N7387Z

【作者名】

jnao

【あらすじ】

今いる世界とは別に違う世界があった。その世界はありえないこととに神がいる。社会があり、国もある。普通に生活する人もいれば、神になろうと意思ひかりを使って戦う人もいた。その世界で私は、俺は…
…。
初投稿です。よろしくお願いします。

きっかけ（前書き）

初投稿です。自分のくだらない想像？を書きました。
もし良かったら読んでくれると嬉しいです。

きっかけ

私は相澤志織^{あいざわしおり}。神崎町^{かんなぎちやう}の中高一貫校、私立神崎学園に通う中学2年生。趣味は特に無く、成績はかなり上。友達も多くクラスの輪にも入っている。自分で言うのもなんだが、「平凡な中学生」だと思う。

夏休みが終わり、2学期が始まってすぐに席替えがあった。私は一番窓側で後ろから2つ目。なかなか良い席なんだけど、友達が近くにいなかった。あまりうれしくない。周りの席で特に話したことがなかったのが、後ろの席の最上和輝^{みなとじゆうかすき}。学校にはいつもぎりぎりであるし、成績も真ん中、いつもボーツとしていて、何を考えているかわからなかった。

休み時間になると、最上君は教室を出ていった。出ていく姿を目で追っていたら、友達の佐藤めぐみ^{さとうめぐみ}が話しかけてきた。

「席離れちゃったね志織ちゃん」

「残念だよなー。ここの席最悪だよ。いいなーめぐみちゃんは。」

そんなくだらない話をして次の授業を受けた。私はめぐみちゃんを親友だと思う。でもめぐみちゃんはどうなんだろう？

学校が終わり、今はもう6時だ。私はバスで通っている。帰る準備をしていたら、最上君がいそいで教室からでて行った。だからか最上君の鞆から何か落ちたけど、気づかなかった。

「最上君、何か……」

私はそれを拾ったけど、最上君はもういなかった。

「ハア……やばっ、もう時間が」

私もいそいで教室をでて行った。

事件発生（前書き）

2話目です。

事件発生

「ハア、持ってきたやつだよ、これ」
バスの中で志織はため息をついていた。

（もう、腕時計はちゃんとつけておいてよね）

そう、和輝が落としたのは腕時計だった。色はシルバーで高級な感じがあるが、真ん中には穴が空いてある変わったデザインだ。

（明日学校行きたくないな。）

席替えて近くには友達がいなく、話したことがない人に時計を渡すのは考えるだけで気が引ける。

駅前のバス停に着いた。

（帰ってお菓子でも食べよ）

バスから降りると辺りが騒がしい。

男子高校生達が話していた。

「さっき浮浪者が出て女の人が襲われたんだって。」

「マジかよ。ま、俺達には関係ないな。」

確かに警察が事情聴取をしていた。

志織の家は駅から自転車で10分の所にある。

（今日は本当に最悪。）

志織は若干イライラしながらその場をあとにした。

駅から5分ほどすれば、人通りも少なくなってくる。空は若干暗くなってきた。志織は気づいていた。さっきから誰かが後を走って追いかけて来ることを。ただの偶然かもしれない。だが志織にはそれがとても怖い。志織はスピードを上げる。すると走っている人もスピードを上げた。志織は頭が真っ白になった。志織の肩が掴まれた。

戦闘（前書き）

3話目です。

戦闘

「つつ！」

志織はあまりの恐怖に声が出なかった。

「やめて！やめてください。」

「おい、ちよつと待てよ。なんで逃げるんだよ。」

志織は驚いた。なんと声の主は和輝だったのだ。

「なんだ、最上君か。なんでこんな所にいるの？」

「なんでじゃないよ。相澤さん、俺の時計持っているでしょ？返して貰おうと思ってたんだけど、逃げちゃうからさ。」

志織はだいぶパニックていたようだ。

「あははははー、そうなんだ。タイヘンダネー。」

「……もしかして浮浪者だと思った？」

「イヤイヤ、ソナナコトナイヨ……。」「（汗）」

「……どうでもいいから時計返してくれる？」

「どうでもいいだって？レディーに向かってそれは失礼じゃない？」

（怒）

「相澤さん、怖い。」

「オイオイ、漫才はそこまでにしてくれないかい？」

『つつつ！』

ふーんは驚いた。急に第三者が会話に入ってきたのだ。

「なんのようだ？」

和輝はあきらかにガラの悪そうな男に聞いた。

「マインドチェーンは金になるからな。」

「それは違法なはずだぞ。だいたい誰が渡すか！」

志織は二人の八についていけなかった。

（マインドチェーン？ 違法？）

「ならば……」

男はそう言いポケットから棒のようなものと腕時計を取り出し、時

計を腕につけた。

「力ずくでもらうぞ！」

腕時計から鎖が出てきて棒のようなものの先につけた。するともう片方の先から槍のようなものが出てきた。

「オラアアア。」

男は槍のようなものを構え走ってきた。

「クソっ！」

和輝は舌打ちし志織を抱きかかえ男から逃げた。

「ちよつとなにすんの？」

「いいからお前は俺の時計をよこせ。早く！」

「う、うん。」

志織はよくわからないまま鞆を探し始めた。

「逃げんじゃねえぞ！」

男は時計から鎖を外し、槍のようなものを投げてきた。

「クッ」

和輝の左腕に刺さってしまった。血が出ている。志織はこんなに血が出ているのを見たことが無く吐き気がした。

「最上君、血が。早く警察を……」

「いいから、と、時計を。」

「何をするの？早く逃げなきゃ。」

「これで終わりだ！」

男は和輝に刺さっている槍を抜き、とどめをさそうとした。

「やめてー！」

志織は叫ぶと和輝の持っていた鞆からオレンジ色の光が漏れ出した。

「まさか、こいつが？」

「なによそ見してんだよ。死ね！」

「死ぬのはお前だ」

和輝の手にはいつの間にか剣が握られていた。

「な、なに？」

男は何が起きたか分からないらしい。だが男の槍と時計は粉々にな

っていた。

「クツソ。覚えていろ。」

男は臭いセリフを吐き捨ててその場を去って行った。

「チツ、仕留め損ねたか。」

志織はその姿を見ても、信じられなかった。同じクラスメイトが血だらけになって剣を握っている姿なんて。

「最上君、私……」

志織も和輝から逃げるようにその場を去った。

戦闘（後書き）

なんかもう文がわけ分からない所があるような気がします。
もし良かったら指摘してくれると嬉しいです。

時計(前書き)

よっしやー4話目

時計

志織は今お風呂に入っている。

(さっきのは何だったんだろう?)

志織はさっきの和輝の事を考えていた。

(夢?幻?)

志織の常識が壊れつつあった。

(明日どんな顔して会えば良いんだろう?)

次の日

「なんだ最上はまた来てないのか。」

担任の先生が出席を取っている。

(やっぱり学校にこないのかな。)

志織は心配していた。昨日あれ程の傷を負ったのだ。

「すみませ〜ん、遅れました。」

そう言っつて和輝が教室に入っつて来た。

「なんだまた遅刻か?いい加減早く来るようにしろ。」

(昨日の傷、大丈夫なのかな?いつもどおり見ただけだ。)

朝のホームルームが終わった。

(やっぱり話しかけるべきかな?)

心配は考えていた。だが、学校では一度も話しかけたこのがないのでやはり緊張する。すると

「昨日は大丈夫だった?相澤さん?」

いきなり和輝が声をかけてきた。

「っつ!うん、大丈夫だったよ。」

志織は声が裏返ってしまった。

「そう?どこか痛かったりしていない?

「うん、あんなこと初めてで怖かったけど……。」

そんな会話をしていると

「痛い 初めて 怖かった？」

「マジかよ。相澤さんと最上が？」

「ウソ？」

教室が騒がしくなった。見ると志織は顔が真っ赤だ。

「ちよつ、ちよつときて最上君。」

ふーんは教室から逃げるように出た。

二人は校舎の裏に来た。

「どうしたの？相澤さん？」

「どうしたの？じゃないよ、もう。」

どうやら和輝は鈍感のようだ。

「？まあ、どうでもいいけど、はいコレ。」

和輝からオレンジ色の腕時計が渡された。

「これは？」

志織は不思議そうに渡された時計を見つめている。

「ちゃんつけててね。」

そう言つて和輝はその場をあとにした。

「う、うん。」

志織は時計をつけようとした。

（高そうな時計だな、ん？）

時計には和輝のものと同じように穴が空いてあり、裏に 相澤 志織 と書かれてあった。

時計（後書き）

漢字苦手です。間違えている所もあると思います。すみません。

心の会話

志織は教室に戻った。するとめいが話しかけて来た。

「ねえ、最上君となに話してたの？」

「べ、別に。たいした事じゃないよ。」

「ふーん。もしかして付き合ってる？」

「そんなわけある訳ないよ。」

「ふーん、そうなんだ。」

めいは少し嬉しそうな顔をしていた。

（もしかしてめいちゃんは最上君のこと好きなのかな？）

そんなことを考えていたら次の授業の先生が来たので席についた。

（どこが好きなんだろう？確か女子と喋っている所なんて見たことないんだよね。）

【だって喋ることないんだもん。】

「え？」

おもわず後ろを向いてしまった。

「相澤、なにしてる？」

「す、すみません。」

先生に注意されてしまった。

（あれ？おかしいな。確かに最上君の声が聞こえたような？）

【気のせいじゃないよ。】

志織はまた後ろを向いく。

「相澤！」

「すみませんでした。」

【ゴメンゴメン、まあ落ち着いてよ。】

志織には意味が分からない。

【驚かせちゃってごめん。でも凄いだろ？。心で話せるんだぜ】

（どうやってんだろう……）

【簡単だよ。心で話したい相手を思って話すだけ。本を読む感じだ

よ。】

【……き、聞こえる？最上君。】

【ああ、聞こえるよ。】

【これって考えていることもわかるの？】

【ああ、さっきのことね。慣れれば分かるようになるよ。】

【……これってどうやってやめれるの？】

【時計の左下のボタンを押せば……ちょっと待て！まだ用があるんだけど……クッス。】

【……なに？】

【だって相澤さん、何も考えないようにしていて、それが……プツ。】

【……（怒）】

【ゴメンゴメン、今日の放課後一人で待っててね。大事な用があるから。もうボタン押していいよ。】

【……】

【……】

【最上君？】

【ん？】

【昨日のあれって、私を助けてくれたの？】

【……偶然だよ。】

【ありがとう。】

【……】

それから少し経ったら授業が終わった。授業が終わるとすぐに和輝は教室を出て行った？志織には和輝の顔が少し赤くなっていたように見えた。

心の会話（後書き）

心の会話は【
勝手にスミマセン。】
【ですることになります。】

いざ異世界へ

時はすでに放課後。志織は一人で和輝のことを教室でまっていた。もう時間なので志織はそろそろバスへ向かわなければいけない。

「待たせてごめん。ついて来て。」

声の主は志織を待たせている張本人、和輝であった。

「最上君、私もう帰らなきゃいけないんだけど。」

「まあまあ」

二人は校舎裏に来た。

「相澤さん、大事な話があるんだ。」

(……まさかこの状況は告白？ええ？ウソ？確かに昨日助けてもらって、急に話す機会も増えたけどいきなりじゃない？でも今までのく話したこともないんだよ。それにめいちゃんは最上君のこと好きなんじゃ？……。)

「聞いてる？聞いてますか？相澤さん？」

「ああ、ごめん。それで話して？」

「うん、その時計の事なんだけど。」

和輝は志織の腕時計を見ている。

「そう言えばなんでこれで心で会話できるの？それに昨日は……。」

「ああ、説明すると長いから……行っただろうが早い。」

「行く？行くってどこに？」

「腕時計の左上のボタンを押して、」

「ねえ、ねえってば！」

「次に穴を触って、穴を前に突き出す。」

志織も同じようにやった。すると穴から光が出て目の前に丸い光の扉のようなものが現れた。

「なに、これ？」

「いいからいいから、光の中に入って。」

和輝に背中を押され、光の扉を通りすぎたら

「わあ……地面がなくなったような感じになり、下に落ちながら視界が真っ白になった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7387z/>

神の世界

2011年12月25日21時52分発行